

# 富木殿御書

文永一一年五月一七日 五三歳

飢<sup>飢</sup>渴<sup>渴</sup>けかち申すばかりなし。米一合も<sup>売</sup>うらず。がししぬべし。此の御房たちもみなかへし<sup>帰</sup>  
て但<sup>ただ</sup>一人候べし。このよしを御房たちにもかたらせ給へ。

十二日さかわ、十三日たけのした<sup>竹下</sup>、十四日くるまが<sup>車返</sup>へし、十五日を<sup>大宮</sup>みや、十六日  
なんぶ<sup>南部</sup>、十七日<sup>此</sup>このところ。いまださだまらずといえども、たいしはこの山中心<sup>しんちゅう</sup>中に  
叶ひて候へば、しばらくは候はんずらむ。結句<sup>けっく</sup>は一人<sup>成</sup>になて日本国に流浪<sup>るろう</sup>すべき<sup>身</sup>みにて  
候。又たちと<sup>見参</sup>まるみならばげざんに入り候べし。恐々謹言。

十七日

日 蓮 花 押

と き ど の